九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

豊子愷『源氏物語』中国注釈の舞台裏

徐，迎春
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/19769

出版情報：語文研究. 107, pp.9-22, 2009-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

豊子愷『源氏物語』中国注釈の舞台裏

徐　迎春

一

中国で最初に『源氏物語』の中国語訳を行った豊子愷（一八九八―一九七五年）は、随筆家、翻訳家、教育者でもあり、さまざまな分野で活躍した、多能多才の知識人であった。豊子愷が『源氏物語』の中国語訳に取り組んだのは一九六一年から一九六五年である。しかし、実際の出版は文化大革命など中国の事情により、かなり後れて一九八〇年から一九八三年になる。豊子愷訳は中国における最初の完訳[注1]でもある。

豊子愷の中国語訳『源氏物語』がいかなるものであるか、その実態ならびに翻訳プロセスを探るのが本稿の目的である。そのために、まず、豊子愷がどのような書物を参考にして、『源氏物語』を訳したかを、明らかにする必要がある。

豊子愷が『源氏物語』の中国語訳を行った際、日本では既に吉沢義則の『対校源氏物語新釈』（一九三七年）、池田亀鑑の日本古典全書『源氏物語』（一九四六年―一九五五年）等読みやすい近現代の校注書が出版されていた。また、現代語訳としては、海外でも名高い谷崎潤一郎訳と与謝野晶子訳があった。当然のことながらそれらが参照されたであろうことは十分に考えられる。

そこで、豊子愷訳に付された「訳後記」、つまり「あとがき」を確認したい。

关于此书之注释本，在日本甚多，主要者可举六种：藤原定家《源氏物语注释》[注2]，四辻善成《河海抄》，一条兼良《花鸟余情》，三条西公条《细流抄》[注3]，中院通胜《岷江

入楚》，北村季吟《湖月抄》。现代日语译本亦甚多，主要者为谷崎润一郎译本，[注4] 与谢野晶子译本，[注5] 佐成谦太郎对译本。[注6] 今此中文译本乃参考各家译注而成。原本文字古雅简朴，有似我国《论语》，《檀弓》，因此不宜全用现代白话文翻译。今试用此种笔调译出，恨未能表达原文之风格也。

訳（この本は注釈書が非常に多い。主たるものに、藤原定家の『源氏物語注釈』、四辻善成の『河海抄』、一条兼良の『花鳥余情』、三条西公条の『細流抄』、中院通勝の『岷江入楚』、北村季吟の『湖月抄』がある。現代語訳もまた多い。主なものに、谷崎潤一郎、与謝野晶子、佐成謙太郎の現代語訳がある。この中国語訳は各現代語訳と注釈書を参考にして成ったものである。『源氏物語』の文章は古雅で簡朴である、我が国の『論語』、『檀弓』に似ている。よりて、すべて現代の白話文に訳すのは適しない。ここに訳し方を試してみたが、原文の風格に到達できなかったことが遺憾なものである。）

（日本語訳は筆者。以下同じ。）

そこで、豊子愷は、現代語訳として、晶子訳、谷崎訳、佐成『対訳』を挙げているが、注釈書については、『源氏物語注釈』、『河海抄』、『花鳥余情』、『細流抄』等のように、中世の代表的な古注を挙げて、近代の頭注もしくは脚注を備えた校注本を挙げていない。

しかし、豊子愷ははたして、近代の校注本を見ず、中世の古注だけを見て中国語訳を試みたのであろうか。

豊子愷訳に言及した笹生美貴子「『源氏物語』の翻訳により開かれる世界――丰子恺译『源氏物語』を中心に――」[注7]は、

丰子恺氏は、少なくとも『源氏物語注釈』『河海抄』『花鳥余情』『細流抄』『岷江入楚』『湖月抄』の六種類の古注釈と谷崎潤一郎・与謝野晶子・佐成謙太郎の三種類の現代語訳を参看していたことが分かる。

と、豊の「訳後記」を文字通りに受け取っている。

それに対して、豊の娘豊一吟が豊訳について記した書簡を紹介する、楊暁文「豊子愷の翻訳――その『源氏物語』訳について」[注8]は、

豊一吟氏は筆者宛の手紙に、「（中略）一句を訳しては必ず四冊の本に目を通す」と書いている。（中略）「四冊の本」は、「父は日本の古語原文を根拠にし、その他の訳本を参考した。いわゆるその他の訳本は、主に谷崎潤一郎、与謝野晶子および佐成謙太郎のものを指す」ということである。（後略）

と述べている。

豊一吟は豊子愷の娘であると同時に、『源氏物語』訳に際して、助手も務めた。豊一吟は、豊子愷が四冊を参考にしたと述べ、そのうち三冊は谷崎潤一郎、佐成謙太郎、与謝野晶子の現代語訳であるという。これは豊子愷が「訳後記」に挙げた三つの現代語訳と一致している。

しかし、問題になるのは、四冊のうちの残りの一冊である。この一冊は恐らく原文に頭注或いは脚注を加えた校注本のことであり、豊一吟が言う「古語原文」に当たる本であろう。この「古語原文」はどのような本であったのか。以下の考察より、まず豊の脚注を検証することによって、その本を明らかにする。

二

豊子愷訳は訳文だけでは十分に意を尽くせない箇所については、脚注を設けて、補足説明を行っている。

例えば、宿木巻には、夏は、女二宮が薫の三条の宮に退出するのに、方角が悪いということで、四月の一日頃、帝が、藤壺で藤の花の宴を催す場面がある。そこで、かつて、藤壺女御に思いをかけていたが、それは叶わず、今度はまたその娘である女二宮にせめて世話役にでもと藤壺に意中を漏らしたが、それもまた叶わず完成せずに終わった大納言が、

われこそかかる目も見むと思ひしか、妬のわざやと思ひゐ給へり。(注9)

と、女二宮を得て帝の婿になって持てはやされている薫に嫉妬している心中が述べられている。

この按察について、豊訳は、

此按察大纳言是谁，古来有两说：一说是红梅右大臣，按察大纳言是他的旧官名；一说是另一人，非红梅。

訳（この按察大納言は誰であろう。古来両説がある。一説は、紅梅右大臣である、按察大納言は、彼の昔の官名である。一説は別人で、紅梅ではない人である。）

と、説明している。

豊子愷の「訳後記」に名が出る谷崎訳は、

此の按察大納言は紅梅右大臣のことか、或いは別人か、古来より両説がある。

と、頭注において解釈しており、豊訳はこの谷崎訳に拠って脚注を施したのであろう。このように豊訳の脚注には谷崎訳の頭注を取り入れた例が多い。

また、同じ豊子愷「訳後記」に名が出る佐成『対訳』を参照した箇所も見られる。

夕顔巻には夕顔が急死する場面がある。夕顔が急死した後、

源氏は夕顔の乳母子であった右近を二条院に連れて来て、夕顔の素性を尋ねる。右近の話で、源氏は夕顔が以前、雨夜の品定めに、頭中将が語ったその恋人であったことが分かる。そして、二人の間に生まれた子供が、今乳母の所に預けている情報も得た。そこで、源氏は、

『……とざまかうざまにつけて、はぐくまむに、咎あるまじきを、……』

と言っている。

この箇所を豊子愷は、

总之，这孩子由我养育，并无不当之处。

訳（まあ、私が此の子を養育しても特によくないところはない。）

と訳している。そして、脚注において、

这孩子是源氏心爱的情人的遗孤，又是他妻子的侄女，故如此说。

訳（この子は源氏の愛していた恋人の遺児であり、また彼の妻の姪でもある。故にこのように言うのである。）

と、源氏が頭中将と夕顔の子供を自分が養育しても何も悪くないと言った、その理由について説明している。

晶子訳は、

私の従兄の中将の子でもある点から云っても、私の恋人だった人の子である点から云っても、私の養女にして育てていいわけだから、

のように、晶子訳にしては珍しい詳しい訳である。しかし、これも豊子愷訳と異なる。

又、谷崎訳も、

まあ何にしても、育てゝ上げて悪い訳はないのだから、

のように、『源氏物語』の原文に即した直訳になっており、豊子愷の脚注と異なる。

ところが、佐成『対訳』は、

しかし、まあ、その子は（自分の愛人の子であり、また葵上の姪に当るのだから）どちらの縁故からいっても、自分が養育するのに不都合はあるまいから、

と、訳している。佐成『対訳』は原文以外に文意を補った箇所を括弧で示している。豊子愷の脚注は、佐成『対訳』が括弧で示した箇所同じ内容であり、佐成『対訳』に拠っていると考えられる。

このように佐成『対訳』を参照して脚注を付した例も豊子愷『源氏物語』には見られた。

谷崎訳にしろ、佐成『対訳』にしろ、豊子愷「訳後記」に名が見える書物である。しかし、豊訳『源氏物語』の脚注には「訳後記」に名が出る参考図書のみによって解決が出来な

い例も数多くあった。

ここにその一例を示す。

若菜下巻は次のような文章で終わっている。

又かのおはします御寺にも、摩訶毘盧遮那の。

省略表現とも見られるこの箇所を、諸訳注書は「（摩訶毘盧遮那の）御誦経或いは御供養が行われた」という文を補って訳している。

ここを豊子愷はどのように訳しているのであろうか。

朱雀院所居之寺中，則礼拝摩訶毘庐遮那。

すなわち、「（摩訶毘盧遮那を）礼拝する」と、日本語訳と同様に、語を補って訳した。そして、脚注において、

摩訶毘庐遮那即大日如来佛，是密宗佛教的本尊。此文似乎未了。据国学家石川雅望说，原本此处大约缺少一行，或损失一纸。

という説明を加えている。

右にあげた豊子愷の脚注の内容は、二点から成る。一つは、「摩訶毘盧遮那は則ち大日如来仏、密宗仏教の本尊である」、つまり「摩訶毘慮遮那」についての説明であり、もう一つは、「此の文章はまだ終わっていないと思われる。国学者石川雅望の説によれば、原文は此処一行欠けているか、或いは一枚損失しているということである」という、この巻の終り方についての解説である。

この注を、豊子愷は何に拠って付したのであろうか。

前掲、豊の「訳後記」では、豊子愷は参照文献として六種の古注を挙げていた。しかし、右の「摩訶毘盧遮那」についての豊子愷の脚注は実は石川雅望の説である。雅望（一七五四―一八三〇年）は、江戸時代後期の国学者であり、狂歌作者でもあった。そして、『源氏物語』の注釈『源注余滴』[注10]の著でも知られている。

その石川雅望の説を『源注余滴』によってあげる。

（前略）「まかびるさなの」とのみにて筆をおくべきものかはこゝはまた〳〵此末一行虫ばみて字のなくなりたるか又つぎ紙の糊はなれて末のかたうせたる成べしそれを後にうつせる人のおのれ補ひかくべきにあらねばそのまゝを写しおきたるを抄どもに様々にいへるならん

石川雅望は、若菜下巻末尾の言葉足らずの一行について、それは虫損による文の消失か、或いは継ぎ紙の散佚によるものだと判断している。これは豊子愷の「国学者石川雅望の説によれば、原文は此処一行欠けているか、或いは一枚損失しているということである」という脚注に酷似している。しかも、これは江戸時代の人石川雅望の説であって、豊子愷が「訳後記」にあげた「古注」によるものでない。ならば、こ

の豊子愷の脚注はどういう経緯で出来上がったものであろうか。豊子愷は雅望説を、何によって知り、脚注に採用したのか。

豊子愷は「訳後記」に六種の古注以外に三つの現代語訳をあげている。しかし、その中の一つである晶子訳は、この若菜下巻の末尾について何も言及していない。

谷崎訳は頭注で、

例のわざと云ひ残せる筆法。摩訶毘盧遮那の祈祷を行はせられたと云ふ意で、摩訶毘盧遮那とは大日如来のことのように、この末尾の筆法と、また、摩訶毘盧遮那とは何であるかについての説明をしているだけで、雅望説についての言及は見られない。

また、佐成『対訳』も、

朱雀院のおいでになる御寺でも、摩訶毘廬遮那仏（大日如来）の御経が読誦されて……。

と、摩訶毘盧遮那が大日如来であることを括弧で示しただけで、ここにも雅望説は見えない。

いずれの現代語訳にも「摩訶毘盧遮那」についての説明はあるものの、雅望説への言及は見出されない。

ところが、豊子愷が「訳後記」に挙げていない金子元臣の『定本源氏物語新解』[注11]には若菜下巻の当該箇所頭注に次のように記されている。

又朱雀院のいらっしゃる仁和寺でも、毘盧遮那佛、即ち大日如来の御祈をなされた。（この末句は省略法とも見られるが、石川雅望は、この末一行蝕んだか或は紙が一枚離れて失せたのであらうといって居る。）

雅望説を採用する豊子愷の脚注はこの金子『新解』に拠って付したと考えられる。

つまり、三冊以外のもう一冊は、以上の考察に拠り、この金子『新解』であったと考えられる。

三

豊子愷『源氏物語』の脚注の中には、漢籍、仏典等についての説明のほかに、和歌についての解説がかなりの部分を占めている。和歌は表面的な直訳的現代語だけでは十分に意味が通じない。日本語の注釈書の場合でも、掛詞、縁語、序詞など和歌特有の修辞表現についての解説が必要になってくる。外国語訳になると、その必要性は尚更である。

豊子愷は「我译《源氏物语》」（『源氏物語』を訳す）[注12]において、

我相信这译文会比西洋文的译文自然些，流畅些。但也难

免有困难之处，举一个例：日本文中，樱花的“花”和口鼻的“鼻”都称为“hana”。《源氏物语》中有一个女子，鼻尖上有一点红色，源氏公子便称这女子为“末摘花”，而用咏花的诗句来暗中讥笑这女子的鼻子，非常富有风趣。但在中国文中，不可能表达这种风趣。我只能用注解来说明。然而一用注解便杀风景了。在短歌中，此种例子不胜枚举，我都无法对付，真是一种遗憾。为了避免注解的杀风景，我有时不拘泥短歌中的字义，而另用一种适当的中国文来表达原诗的神趣。这尝试是否成功，在我心中还是一个问題。

訳（私はこの訳文が西洋の訳文よりは少し自然で、且つ流暢だと思う。しかし、その中には手を焼くものもあった。その一例を挙げる、日本語では「桜」の「はな」も「鼻」もみな「はな」と言う。『源氏物語』には鼻先が少し赤い女君がいる。源氏はこの女君を「末摘花」に名付けて歌を詠むが、実はその歌は暗にこの女君の鼻が赤いことをからかっている歌で、とても面白い。しかし、中国語に訳す時、その雰囲気をなかなか出せない。私は注をつける方法を取ったが、結局は殺風景になってしまった。就中、歌に、この類が枚挙に暇がない、手に負えない、遺憾の極みである。殺風景にしない為にある時は歌の意に拘らず、適当な中国語で原歌の面白みを訳出する場合もあった。この試みは成功したかどうか、内心まだ疑問である。）

と述べているが、ここには歌を訳す際の豊子愷のそれなりの工夫が見られる。

豊子愷が「訳後記」に挙げた三つの現代語訳をみると、晶子訳を除く、谷崎訳と佐成『対訳』には現代語訳が付されている。但し、谷崎訳の場合、訳文中ではなく、「和歌講義」として別巻二冊に詳しい説明とともに収められている。豊訳の歌は、おおむね、此の三書に拠っている。

ところで『源氏物語』には、また、作中人物が詠んだ七百数十首の歌とは別に、彼らが古歌の一部を口ずさんだり、或いは地の文において断片的に引用されたりする歌、すなわち「引歌」もある。日本語の現代語訳においては、どのように処理されているか。谷崎訳は、頭注において引歌の本歌とその出典を記して、場合によっては部分的な解釈が見られるが、訳文はない。佐成『対訳』は、引歌の出典は示さず、引歌全体を訳す場合と、引用された句のみを訳す場合がある。晶子訳は訳文中に引歌の全句を括弧付きで示すが、訳は施さない。さらに、豊子愷が中国語訳に際して、参照したと思われる金子『新解』も引歌の出典しか示さず、その訳はほとんど付さ

れていない。すなわち、豊が参照した日本の現代語訳注書において、引歌箇所、あるいは、引歌の典拠項は必ずしも訳されていないということである。そういう場合、豊はどのようにして中国語訳し、あるいは解釈を施したのであろうか。具体例に沿って、その点を考察する。

宇治十帖、総角巻に、宇治の中の君への通いが思うままにならぬ匂宮のために、薫が紅葉狩を企てる場面がある。到着した宇治の宴席で、管弦の演奏をしたり、漢詩を作ったりしながら、皆歓楽を尽くしている中で、中の君に逢うこと叶わぬ匂宮の心境が、

「近江の海」の心地して、

と、述べられる。

この箇所を、豊子愷は、

独有匂亲王怀着〝何故人称近江海？〟的心情。

訳（匂宮だけ「何故人は近江の海と言うのだろう」という気持ちだった。）

と、訳し、また脚注において、

古歌：〝四处不见海藻生，何故人称近江海？〟见《后撰集》。日语中〝海藻〟与〝相见〟同音，〝近江〟与〝相逢〟同音。故等于说：〝这里不生叫做‘相见’的植物，为何人称这海谓‘相逢’？〟

訳（古歌の「どこにも海藻が生えていないのに、人は何故近江の海というのだろう。」『後撰集』を見よ。日本語では「海藻」と「相見」は同音、「近江」と「相逢」は同音だ。故に、「ここは『相見』という植物が生えないのに、何故人はこの海を『相逢』というのだろう。）

のように、匂宮の心中を「近江の海の心地」という引歌を用いて表現した理由について詳しく説明している。

しかし、金子『新解』の、

後撰、「いかなれば近江の海ぞかるゝてふ人をみるめの絶えて生ひねば」によって、逢はれぬを擬へた。

と歌を挙げるのみで、詳しい解説はなく、また、谷崎訳も、

宮だけは「あふみの海」の思ひが遊ばして、

単純な直訳と頭注での後撰集歌「いかなれば」の指摘のみにとどまっている。(注13)

豊子愷は恐らく金子『新解』と谷崎訳を参照したであろう。しかし、金子『新解』にも、谷崎訳にもこの引歌についての現代語訳は見当たらない。豊子愷は何に基づいて右記の引歌を訳出したのだろうか。

豊子愷が参考文献に挙げた訳注書に目を向けると、谷崎訳の付編として昭和三十年に出版された玉上琢弥篇『源氏物語の引き歌』（以下、玉上『引き歌』と略称する）に行き当た

る。そこには、引歌の本歌、その現代語訳、及び出典が記されている。

玉上『引き歌』の、総角巻当該箇所の記載は次の通りである、

いかなればあふみの海のかゝりてふ人を見るめのたえて生ひねば

人を見るといふ海松が全く生えないのに、どうして、近江の海（人に逢ふをかける）などゝいふのだらうか。

「近江」に「逢ふ」が、「海松」に「見る」が、掛けられてゐる。本文、「見る目がない」即ち中姫君にあはれない気持を、この歌によって「近江の海の心地」と表現したもの。

釈、ふかけれどあふみのうみぞ　奥入、あふみのうみぞ

「『近江』に『逢ふ』が、『海松』に『見る』が、掛けられてゐる。」という掛詞についての説明は、豊子愷の「日本語では『海藻』と『相見』は同音、『近江』と『相逢』は同音だ。」という脚注に酷似している。歌の訳も豊子愷は同書を参照したと思われる。[注14]

ただし、その『後撰集』という出典については問題がある。玉上『引き歌』が『源氏釈』と『源氏物語奥入』を挙げているように、この歌は、実は『後撰和歌集』には存在しない。しかし、豊子愷は谷崎訳と金子『新解』の間違いをそのまま踏襲して、この引歌の出典を『後撰和歌集』としたのである。玉上が正しい出典『源氏釈』と『奥入』を挙げているのに、豊子愷が、玉上の訳のみを採り、出典を無視して、谷崎訳、金子『新解』の誤りを踏襲したのは、豊子愷にとって、『源氏釈』と『源氏物語奥入』がいかなる書物か分からなかったか、あるいは多少分かっていたとしても、確認するすべがなかったからであろう。

この総角巻「近江の海の心地して」の例は、豊子愷所持の諸書に引歌の指摘があるものの、その訳が施されていないために、豊子愷は玉上の『引き歌』の訳を利用したと考えられる例であるが、更に、豊子愷所持の金子『新解』、谷崎訳、佐成『対訳』、晶子訳に、引歌の指摘がない場合もある。

明石巻で、源氏から初めて送られてきた手紙に明石の君はなかなか返事をしない、そこで、父親である明石入道が代筆する場面がある。

「いとも畏きは、田舎びて侍る袂に包み余りぬるにや、……」

この箇所を、豊子愷は、

惟小女生长蓬门，少见世面，想是，今宵大喜袖难容，之故吧。

訳（うちの娘は蓬が生い茂ったなかで育ったもので、世

間知らずです、それで「今宵の嬉しさは袖では包みきれない」のでしょう。）

となっており、頭注において、

古歌：〝昔日有喜藏袖中，今宵大喜袖难容。〟見《新勅撰集》。

訳（古歌の「昔は喜びがある時は袖の中に隠したが、今宵のうれしさはこの袖では包みきれない。」『新勅撰集』を見よ。）

と、『新勅撰和歌集』を出典に挙げる。

それに対して、金子『新解』の頭注に、

余りの勿体なさは田舎者の分に過ぎた故か御文すら拝見しかねてゐる程恐れ入って居ります。

と訳すものの、引歌についての指摘はない。谷崎訳もまた、頭注で古歌の有無に触れていない。佐成『対訳』と晶子訳にもない。

そこで、玉上『引き歌』を見ると、

うれしさを昔は袖に包みけりこよひは身にもあまりぬるかな

嬉しさを、昔は、袖につゝむやうに、じつとつゝみかくしてゐたものでした。でも今宵のこの嬉しさは、身にあまる程で、到底つゝみ切れません。

釈、奥入、新勅撰集巻七、賀（四五六）題しらず　読人しらず　朗詠集巻下、雑、慶賀

豊子愷は恐らく右の玉上『引き歌』によって引歌の存在を知り、その出典を示して、訳したのだろう。

このように引歌の訳は勿論、引歌の出典も玉上『引き歌』を参照する場合があったと推測される。

しかし、引歌の指摘がない場合も見られる。つまり、玉上『引き歌』、谷崎訳、金子『新解』いずれにも引歌の指摘があるにも関わらず、引歌を指摘せず、そのまま訳す場合があった。

例えば、帚木巻は雨夜の品定めから始まるが、その一節に、源氏が宮中にのみ気楽にお仕えになって、葵上のところへは途絶えが多かったので、左大臣邸では「忍ぶの乱れや」と疑ったという一場面がある。これは『伊勢物語』の「春日野の若紫の摺衣忍ぶの乱れ限り知られず」を踏まえたものである。

しかし、この箇所を豊子愷は、

左大臣家的人都怀疑：莫非另有新欢？

訳（左大臣邸の人々は「もしかしたら新しい恋人でもできたのでは」と疑っていた。）

と、訳すのみで、引歌についてはまったく触れていない。

しかし、玉上『引き歌』、谷崎訳と金子『新解』はこの

「忍ぶの乱れや」の出典を『伊勢物語』だと記している。

それに対して、豊子愷が「訳後記」に、参照した現代語訳としてあげている谷崎訳以外の晶子訳と佐成『対訳』をみると、

（晶　子　訳）別に恋人を持って居るかのやうな疑ひを受けて居たが、

（佐成『対訳』）忍びかくれての外泊りかと、左大臣邸ではお疑い申すこともあったが、

のように、豊子愷と同じく引歌については何も言及していない。

源氏の読者は「忍ぶの乱れや」の句からはただちに、『伊勢物語』を連想したであろう。それゆえ、晶子訳と佐成『対訳』は敢えてこの引歌を指摘しなかったかと推測される。『源氏物語』の読者なら、誰でも知っているはずだからである。

しかし、中国語訳になるとそうはいかない。引歌を指摘せずには、紫式部が「忍ぶの乱れや」という言葉を用いた意図が中国の読者には伝わらない。勿論ここは、佐成『対訳』と晶子訳を参照してのことであろうとは思うが、同じように、谷崎訳、金子『新解』に引歌の指摘があるにも関わらず豊が引歌に言及しない例が、桐壺巻から末摘花巻にかけてはしばしば見出される。それに対して、末摘花巻以降、紅葉賀巻からは、引歌の指摘が多くなる。

なにゆえ、引き歌の指摘に関してこのような落差が生じるのであろうか。考えられるのは、引歌について、厳密な考証を行い、詳しい解説、訳文までを付した玉上『引き歌』の出現の影響であろう。豊訳における引歌についての言及が、紅葉賀巻から急に増加するということは、その時点で、玉上『引き歌』を参照できるようになったからではないだろうか。当時の日中関係を考えれば、一九五五年に出版された玉上『引き歌』が直ちに豊子愷の手に渡るとはかぎらない。豊子愷が末摘花巻を終えたのは一九六二年である。[注15] 従って、豊が玉上『引き歌』を入手したのはほぼそれ以後、紅葉賀の訳を開始する前までの間だと推測される。

紅葉賀巻から指摘が増える、豊子愷『源氏物語』の引歌は、大概は玉上『引き歌』、谷崎訳、金子『新解』に従って、脚注に示される。

他方、真木柱巻に、玉鬘が宮中を退出する際、先の事まで約束する帝の優しさに恐縮するあまり、

われはわれと思ふものをと思す。

の如く、彼女の心理が語られている場面がある。

この箇所を、豊子愷は、

玉鬘诚惶诚恐，想道：”，梦境迷离我不知，呀！“

訳（玉鬘はおそるおそる思うには、「夢路に迷うような、私も私のことが分からなくなった！」）

のように、‘’で引歌であることを示すにとどまり、その出典、及び一首全体については記さなかった。

しかし、この箇所の豊子愷訳は、豊子愷が玉上『引き歌』を参照した証拠にもなる。なぜならば、この引歌の出典については異説があるからである。豊子愷のこの箇所の訳は、玉上『引き歌』に指摘が見られる、後撰集歌「うつゝにて誰契りけん定めなき夢路にまよふ我は我かは」の下句「夢路にまよふ我は我かは」をのみ訳したものである。

また、朝顔巻に、世間で、源氏と朝顔の姫君との関係を取り沙汰されていて、しかも、当の源氏も紫の上に夜離れがちだった際、

戯れにくくのみ思す。

と、紫の上が源氏に会えない気持が述べられている。

この箇所を豊子愷『源氏物語』は、

因此紫姬便如古歌所咏：”暂别心如焚，方知戏不得。“

訳（それを、紫の姫君は古歌の「試しに暫く逢わなかったら、恋しさはつのってしまった、冗談ごとはできないと今はじめて分かった！」のように、思った。）

の如く、本歌になる「ありぬやと試みがてら逢ひ見ねば戯れにくきまでぞ恋しき」一首全体を訳すのみ、『古今和歌集』という出典は指摘しなかった。

このように引歌の指摘の形は、一様ではなかった。ただ、今回は豊子愷が引歌の訳出に際して、参照したと思われる参考書の指摘のみに止めたい。

豊子愷は引歌の現代語訳においては、ほとんど玉上の『引き歌』の訳を参照したと思われる。しかし、その出典は、例えば谷崎訳と金子『新解』が示さない場合、玉上『引き歌』に拠るが、谷崎訳と金子『新解』に出典が示されている場合は、おおむね谷崎訳と金子『新解』を採るという傾向が見られた。それは先述のように、玉上の『引き歌』の原歌の出典提示が専門的で豊子愷には理解に苦しむことが少なからずあったからであろう。

中国語訳に際して、一つの注釈書だけに頼らず、脚注においても、少なくとも谷崎訳、金子『新解』、佐成『対訳』、玉上『引き歌』という四本を参考にしたということは、豊子愷の学問的誠実さを示すといえよう。

その脚注には、引歌の例として挙げた、宇治十帖、総角巻の「近江の海の心地して」の場合のように、谷崎訳と金子『新解』の間違いをそのまま踏襲したものもあった。しかし、

最初の、完訳の形として『源氏物語』を紹介した豊子愷訳が、わずか一年にも満たない留学の成果であったというのは、ある意味で、驚くべきことである。

注

注1　中国で出版された『源氏物語』の中国語訳は、以下のものがある。
钱稻孙译《源氏物语》（人民文学出版社《译文》、一九五七年）
丰子恺译《源氏物语》（人民文学出版社、一九八〇―一九八三年）
林文月译《源氏物语》（中外文学月刊社、一九七八年）
梁春译《源氏物语》（云南人民出版社、二〇〇二年）
夏元清译《源氏物语》（吉林摄影出版社、二〇〇二年）
殷志俊译《源氏物语》（远方出版社、二〇〇五年）
姚继中译《源氏物语》（深圳报业集团出版社、二〇〇六年）
郑民钦译《源氏物语》（北京燕山出版社、二〇〇六年）
なお、本稿で用いる豊子愷『源氏物語』は二〇〇一年に人民文学出版社から出版されたものである。

注2　『源氏物語奥入』のことである。

注3　佐成謙太郎の『対訳源氏物語』（別巻）で『細流抄』を西三条公条の著書とすることに拠ると思われる。

注4　谷崎潤一郎『潤一郎訳源氏物語』二十六冊（中央公論社、一九三九―一九四一年）以下、谷崎訳と略称する。

注5　与謝野晶子『新新訳源氏物語』六冊（金尾文淵堂、一九三八―一九三九年）以下、晶子訳と略称する。

注6　佐成謙太郎『対訳源氏物語』七冊（明治書院、一九五一―一九五三年）以下、佐成『対訳』と略称する。

注7　『物語研究』（第七号、二〇〇七年）

注8　『豊子愷研究』（東方書店、一九九八年）

注9　『源氏物語』の本文の引用は、佐成『対訳』に拠る。

注10　国書刊行会、一九〇六年。

注11　明治書院、一九二五―一九三〇年。以下、金子『新解』と略称する。

注12　『丰子恺文集』文学巻二（浙江文艺出版社、一九九六年）

注13　谷崎訳が「いかなればあふみの海のかゝりてふ人を見るめのたえて生ひねば」という古歌を引くのに対して、金子『新解』は「いかなれば近江の海ぞかるゝてふ人をみるめの絶えて生ひねば」という歌を引いているが、金子『新解』の「かるゝ」は「かゝる」のミスであろう。

注14　猶、豊子愷は玉上『引き歌』の「『海松』に『見る』が掛けられている」の箇所を、「『海藻』と『相見』が日本語では同音である」と解説しているが、これは恐らく左に挙げる佐成『対訳』の影響であろう。
すなわち、
匂宮は、（古歌にいわゆる）「海藻（みるめ）＝見る目のない近江の海」のような（恋人に逢えないはかない）心地がして、

注15　と、佐成『対訳』は訳している。
豊子愷は一九六二年の日記「我译《源氏物语》」（注12と同じ）において、
现在我已译完第六回〝末摘花〟，今后即将开始翻译第七回〝红叶贺〟。
（現在、私は既に第六回の「末摘花」を訳し終えている。

これからは第七回「紅葉賀」を訳す。）

と記している。

【付記】本稿は、平成二十年六月の九州大学国語国文学会での口頭発表に加筆修正を施したものである。発表の席上及び発表後、多くの方々に有益な御教示を賜った。記して感謝申し上げる。

（じょ　げいしゅん・本学大学院博士後期課程）